

と、筆者の所属する研究室の博士後期課程学生の田中知成が、合成部門で2件しかないポスター賞を頂戴することができた。この受賞により、研究室としてのアクティビティの高さを実感することができ、非常に有意義な会議であった。

ICSは隔年での開催となっており、次大会(2010年)は

幕張メッセ(千葉)での開催となる。世界の糖科学者が一同介するせっかくの機会であるので、若い研究者、とりわけ大学院生のより多くの参加を期待したい。

最後に、本国際会議参加にあたり、出席費を補助していただいた農芸化学研究奨励会に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第5回世界アレロパシー会議(5th World Congress on Allelopathy)

近畿大学農学部応用生命化学科 森本正則

2008年9月21~25日の期間にアメリカニューヨーク州サラトガスプリングスで開催された第5回世界アレロパシー会議(5th World Congress on Allelopathy)に出席した。サラトガスプリングスは、ニューヨーク州北部の競馬で有名な小さな避暑地の町である。また、慣れ親しんだポテトチップス発祥の町としても知られる。今回、サラトガスプリングスへは、ニューヨーク州の州都アルバニーが最寄りの空港となり、そこからは学会の準備した車で会場へ送迎してもらった。ニューヨークと言うとマンハッタンから連想される大都会をイメージするが、ニューヨーク州のほとんどが自然豊かなところであり、フィンガーレイク、ハドソン川、ロングアイランドは、生産量全米第2位のワインの産地としても知られる。

学会の名称となっているアレロパシー(他感作用)とは、異種生物間相互作用を意味する言葉であり、筆者の研究分野である化学生態学もその一部として位置づけられている。今回は150名程度の参加者があり、例年通りであった。国際学会としては、こじんまりとした集まりである。ゆえに会期中は皆で行動を共にする感じで、ランチもエクスカージョンも選択の余地はなく「みんな、いっしょ」である。最近では、アメリカ化学会などの巨大学会と比べて、これが逆に心地よく感じる。筆者が、この国際会議へ出席するのは、今回で3度目である。

今回は、サラトガヒルトンホテルを会場として開催された(写真1)。まず基調講演としてワシントン州立大学N. G. Lewis博士が、植物二次代謝産物について概説され会議が始まった。筆者は初日午前という早い時期にメイントピックス8:植物根圏での相互作用(Interaction in the rhizosphere)に関するセッション中での招待講演者として、「Fate of phytotoxic allelochemicals produced by *Cyperus rotundus* in environment and change of their phytotoxicity」というタイトルでカヤツリグサ科ハマス



写真1 学会会場であるサラトガヒルトンにて

ゲ由来のアレロケミカルとして知られるセスキテルペン類の環境中での変化とその類縁体の植物毒性についての口頭発表を行った。本発表は、学会初日だったため会場の聴講者も多く、適度な緊張感が得られた。

会議の内容としては、自然界での現象の確認から活性物質の同定、それらの生合成研究、活性化合物の環境中での変化と周辺生物に与える影響の変化やそれらの農業利用といった、現象論から応用研究までが広く話題提供された。なかでも植物-植物間相互作用に関する植物生長阻害物質に関する研究が多かった。以前は活性化合物の単離同定などの報告が多かったが、今回は土壌や微生物を介在させた研究が多く報告された。例えば、植物体内で生合成される二次代謝産物が環境中に放出されると数日で完全に他の物質に変換され、それが植物毒性を持つようになったり、その逆に活性を失ったりするといった具合である。植物-昆虫間相互作用においては、アレロケミカルが昆虫の代謝系を活性化して植物の防御物質感受性を低下させるなど、共進化の一端を見るような興味深い報告もあった。

エクスカージョンでは、アメリカ独立戦争中のサラトガ



写真2 サラトガ古戦場で一面に繁茂している外来雑草の
Centaurea maculosa

の戦いがあった史跡を訪ねた。そこでは、外来雑草などの観察会も行われ、今回の学会にも参加されていたモンタナ大学 R. M. Callaway 博士らの Nature 掲載論文で有名になった外来雑草であるヤグルマギク属植物 (*Centaurea maculosa*) などを見ることが出来た (写真 2)。その後、レイクジョージの遊覧船上で夕食会が開かれた。

今回の会議には筆者の 2006～2007 年の留学先であった S. O. Duke 博士が研究リーダーを務めるアメリカ農務省 (USDA-ARS, Natural Product Utilization Research Unit) の研究室からも多くの研究者が出席されていた。この会議を機に Duke 博士が国際アレロパシー学会会長に就



写真3 サラトガスプリングスの町中で見かけた IAS のポスター

任された。

さらに同じ分野の研究者ということで国際学会で会う機会が多い顔見知りの研究者とも情報交換や談笑が出来、有意義な時間が過ごせた。筆者が留学先を探していた頃は、国際学会出席の折りに研究者と話をし、留学先の研究室情報の収集にも精を出したものだ。余談であるが、今回、町中の多くの店先で IAS (国際アレロパシー学会) のポスターを目にしたことには驚いた (写真 3)。

最後になりましたが、今回の第 5 回世界アレロパシー会議出席にあたり、助成を賜りました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、お礼申し上げます。

第 57 回 (平成 19 年度) 国際会議出席費補助金受領者で「第 3 回アジア太平洋分子動態代謝学会議」に出席予定であった北海道大学大学院薬学研究院 板垣史郎氏の報告につきましては、所属機関から新型インフルエンザの感染拡大に伴う自宅待機および海外渡航の自粛の通達により、出席を中止し、補助金を返還されました。
